様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 １５ 日現在

機関番号：３７１３０
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2021
課題番号：１７Ｋ１２１１９

研究課題名（和文）看護教員コンピテンシーモデルの開発と検証

研究課題名（英文）Validation and Development of a competency model for nurse educators in Japan

研究代表者
大池　美也子（Miyako, Oike）

福岡国際医療福祉大学・看護学部・教授

研究者番号：８０２８４５７９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：看護教員の大学教員としての能力とキャリア発達を目指す看護教員コンピテンシーモデルの開発を目的とした。看護系大学看護教員を対象にモデル原案（6大項目62項目）を調査した。《1. カリキュラムを理解し参画する》、《2.学習者の専門職としての職能開発と社会化の促進を行う》、《3. 組織運営における自己の役割を果たす》、《４. 専門領域の研究に継続的に取り組む》、《5. 教育・学習に関する評価を行う》、《6.目標に即した授業計画を立案する》、《7. 実習先との連携と調整を図り改善する》、《8関連する職能団体に参加する》が抽出され、各因子のα係数は0.8以上であり、本モデルの信頼性と妥当性が確認された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
日本の看護教育は高等教育化を辿り、看護系大学に従事する看護教員の質的量的な課題がある。開発された看護教員コンピテンシーモデル（8因子50項目）は、看護教員の能力形成に段階とともに、キャリアや将来を見通すことに貢献できる。また、WHOやNLNによるコンピテンシーモデルと比較し、《7. 実習先との連携と調整を図り改善する》因子は日本における看護教員の特徴といえ、我が国独自のコンピテンシーが示された。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to report research for development of a nurse educator competency model that contributes to the professional development of nursing faculty. The draft model included 6 core competencies and 62 items. As results, This model was modified with 8 factors and 50 items: (1) understand and participate in the curriculum, (2) promote professional development and socialization of students as specialists, (3) fulfill one's role in organizational management, (4) continue to engage in research within specialty, (5) conduct assessment regarding education and learning, (6) create lesson plans that align with goals, (7) improve teamwork and coordination at practice sites, (8) participate in specialist organizations. The reliability and validity of the model was confirmed by calculating Cronbach's α and comparing each factor score by group, based on years of participant education experience.

研究分野：看護教育

キーワード：看護教員　看護教育　看護系大学　コンピテンシー

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

日本の看護教育は高等教育化を辿り、看護系大学は急速に増加している。それに伴い、看護系大学に従事する看護教員の質的量的不足が重要な課題となっている。看護系大学に所属する看護教員の資格要件には、看護職として３年から５年以上の臨床経験があることと、大学設置基準によって定められた博士・修士の学位や研究業績等がある。これらの要件には、看護教員の教育に関する資質や能力あるいは教育実績は、反映 されていない。看護教育に関する研修においても、専門学校の看護教員には課せられているが、看護系大学の看護教員には課せられていない。大学教育機関では、教育能力の習得 に向けた組織的な取り組みとして、Faculty Development(ＦＤ)がある。しかし、ＦＤを進めていくための方向性や具体的な支援方法が全ての看護系大学に充実しているとはいえない。臨床の場から教育機関へと教える立場に移行した看護教員が大学教員として必要な知識と技術を学ぶ機会はほとんどなく、看護教育に関する体系的な学習についても明確に 示されていない。

看護教員の育成に関する国内の先行研究では、看護教員としてのアイデンティティが 看護師と比較して低いことや看護教員の職業ストレスが高いことなどが報告されていた。 また、看護教員自身による教育活動の改善に向けて、教授活動自己評価尺度や看護大学教員能力自己評価尺度などの開発があった。一方、国外では、学問的発展への貢献者や学生へのサービス提供者、あるいは管理者や学部長など多様な役割と責務を担う看護教員の立場に関する報告があり、看護教員のキャリアとして、教育機関における職位とその能力を段階的に関連づけたモデルの紹介があった。さらに、看護教員が臨床から教育へ移行することは新たな役割開発としてみなされ、World Health Organization(WHO)や National League for Nursing(NLN)は、看護教員に必要なコンピテンシーを示していた。我が国では、看護教員の教育活動に着目される傾向にあり、看護教員にはどのような能力が求められているかは明確に示されていないとともに、看護教員が自分のキャリアや将来を見通していくことも検討されていないことが考えられた。

２．研究目的

このような背景から、本研究は、看護教員が、大学教員としての能力を育成するとともに、キャリア発達への貢献を目指して、看護教員（nurse educator）コンピテンシーモデルを開発するこ とを目的とした。

３．研究方法

１）看護教員コンピテンシーモデルの構成概念の作成

WHO や NLM による看護教員コンピテンシーや本研究代表者が取り組んできた看護教員のライフストーリー研究、さらに我が国における看護教員の教育能力に関する文献を参考 に、看護教員コンピテンシーモデルとなる構成概念原案を作成した。なお、NLN は、Certified Nurse Educator(CNE)の資格試験に関わる 8 つのコアコンピテンシーを、WHO は 8 つのコアコンピテンシーを示していた。その結果、モデルの原案は、＜１．学習を支援し促進す る（16 項目）＞、＜２．学習者の専門職としての職能開発と社会化の促進を行う（11 項 目）＞、＜３．教育・学習に関する評価を行う（８項目）＞、＜４．カリキ ュラムを理解 し参画する（10 項目）＞、＜５．研究に取り組み、社会貢献に関わる大学教員としての責務を果たす（９項目）＞、＜６．組織運営における自己の役割を果たす（８項目）＞となる６つのコア項目、コードとなる項目が 62 項目として作成された。

これらの項目を、教育経験年数５年以上の看護教員 10 名が、大学教育機関における看護教員のコンピテンシーに関連してい るか否かを郵送により検討した。その結果、大幅な変更は認められず、各項目の文章表現など指摘された事項を修正し、本モデルの構成概念原案とした。

２）調査項目：対象者の属性（性別や教育歴など 12 項目）とともに、構成概念原案（62 項目）はリッカート法による 4 件法（自分にあてはまる～自分にあてはまらない）で調査を行った。

３）研究対象

全国の看護系大学（275 校）に所属する看護教員

４）データ収集方法

看護系大学の学部長もしくは学科長宛に研究への協力を依頼し、調査に協力する看護教員の数を確認した（2135 名）。協力が得られた看護系大学へ再度協力人数分の研究説明書及び調査用紙、返信用封筒を送り、対象者への配布を依頼した。

５）データ収集期間

2019 年 5 月から 7 月末まで

６）分析方法

（１）対象者の概要に関する記述統計

対象者の概要では、年齢、性別、臨床経験年数、教育経験年数、最終学歴、教育に関する研修などを度数および割合により算出した。構成概念原案全項目の記述統計量を算出し た。

（２）項目分析

天井効果・フロア効果を確認するため、各項目の平均値±標準偏差の値が測定値の上限（４を超える)、測定値の下限（１未満）を削除基準とした。探索的因子分析として、主因子法・プロマックス回転を用い、因子負荷量が 0.4 以下及び一つの項目が複数の因子に 高い負荷量を示す場合には、削除することとした。

（３）信頼性の検討

信頼性は、Cronbach’sα 係数を採用し、0.7 以上を基準とした。

（４）構成概念妥当性の検討

構成概念妥当性として、教育経験年数別による各因子得点を比較することとし、 Kruskal-Wallis test を用いた。統計解析は統計ソフト IBM SPSS Statistics 24.0 for Windows を用い、統計的検定の有意水準は 0.05 とした。

４．用語の定義

看護教員：看護系大学に所属し、一定の臨床経験を備えて看護学を教える教員

コンピテンシー： NLN による定義を参考とし、コンピテンシーを看護教育に関わる大学教員としての経験を積み重ねながら備わっていく高度な特質とした。コンピテンシーには成果をあげることに関わる場合もあるが、熟達者としての看護教員とした。

５．倫理的配慮

国際医療福祉大学倫理審査委員会の承認を得た（番号 18-Ifh-042） 調査実施にあたっては、調査対象者の所属する看護系大学の学部長もしくは学科長宛てに研究への協力を依頼し、説明書および依頼文を郵送するとともに、調査対象者への説明書には、 研究の目的と意義、個人情報の

保護、研究参加や拒否の自由などを記載した。本調査は、 調査用紙の返送をもって同意する旨の説明を記載した。

６．研究成果

１）本モデルの信頼性と妥当性

2135 名の配布から、641 名（30%）が回収された。そのうち調査項目に欠損を認めない 566 部（有効回答率 26.5%）を分析対象とした。モデル原案 6 コア項目 62 項目全ての記述統計量から天井およびフロア効果を確認した。その結果、天井およびフロア効果を認める項目はなかった。

主因子法、プロマックス回転にて因子分析を行った。その結果、因子負荷量（Factor loading）が 0.4 以上の下位尺度を採択し、また、複数の因子と強い影響を示す下位尺度を除外して、因子の単純構造化に至るまで因子分析を繰り返した。因子の解釈については、 因子負荷量（Factor loading）が 0.4 以上の基準を満たした下位尺度で因子の解釈を行った。因子負荷量が小さい 11 項目（1-4)、1-5)、1-6)、1-7)、1-8)、1-9)、1-10)、1-11)、 1-12)、3-2)、5-10))、複数の因子にまたがる項目（5-9)）は削除し、8 因子 50 項目とな った。

8 因子 50 項目の結果から、第 1 因子は、＜４．カリキュラムを理解し参画する＞が反映 され、「カリキュラムを理解し参画する」とした。第 2 因子は、＜２．学習者の専門職と しての職能開発と社会化の促進を行う＞が反映され、「学習者の専門職としての職能開発 と社会化を促進する」とした。第３因子は、＜６．組織運営における自己の役割を果たす 3 ＞が反映され、「組織運営における自己の役割を果たす」とした。第４因子と第８因子は、 ＜５．研究に取り組み、社会貢献に関わる大学教員としての責務を果たす＞が二つに分か れ、第４因子を「専門領域の研究に継続的に取り組む」とし、第８因子を「専門領域団体 へ参加し社会貢献に取り組む」とした。第５因子は、＜３．教育・学習に関する評価を行う＞に含まれており、「教育・学習に関する評価を行う」とした。第６因子と第７因子は、 ＜１．学習を支援し促進する＞が二つに分かれ、第 6 因子 を「目標に沿った授業計画を作 成する」とし、第 7 因子 を「実習先との連携と調整を図り改善する」とした。各因子の Cronbachα 係数は 0.84 から 0.95 であった。教育経験年数を 3 群（1～4 年、5～14 年、15 年以上）により、各因子得点を比較した結果、第 4 因子「専門領域の研究に継続的に取り組む」以外の各因子において $p<0.001$ であった。

構成概念原案の α 係数は、各因子において 0.8 以上であり、内的整合性が高いことが確認された。8 因子 50 項目となった本モデルは、看護教員が自己のコンピテンシーを把握したり、コンピテンシーを育成したりしていくための指標として、一定程度の信頼性と妥当 性が示されたと考える。

２）本モデルの特徴

本モデルでは、「1. カリキュラムを理解し参画する」、「２．学習者の専門職としての職能開発と社会化を促進する」、「３．組織運営における自己の役割を果たす」、「４．専門領域の研究に継続的に取り組む」、「５．教育・学習に関する評価を行う」、「６．目標に沿った授業計画を作成する」、「７．実習先との連携と調整を図り改善する」、「８． 専門領域団体へ参加し社会貢献に取り組む」８因子 50 項目が見出された。 各因子は、看護教員が大学教員として身に付ける必要性が高い項目でもあるとともに、 新人看護教員や熟達看護教員がどのような能力を備えているか、あるいはどの程度に位置しているかなどを知る手がかりになると考える。

NLN や WHO による看護教員のコンピテンシーでは、実習担当に関わる看護教員の現状は反映されていない。本モデルの因子「７．実習先との連携と調整を図り改善する」は、日本の看護系大学に所属する看護教員が実習先と連携を図ったり、実習指導者や看護師長らと調整したりしている実態を示しているといえ、我が国における看護教員の特徴的なコンピテンシーを示すことができたと考える。また、看護教員が 看護系大学においてカリキュラムに関わる機会は、経験年数がある教員のほうが多く、新人看護教員が所属する大学がカリキュラムの系統的を学ぶことは少ない。新人看護教員は日々の大学業務などに追われるためゆとりがないが、そのような状況においても看護教育のカリキュラムを体系的に学ぶ優先性が示されたものといえる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 大池美也子、道面千恵子	４．巻 31
２．論文標題 Survey report on the development of a competency model for nurse educators	５．発行年 2022年
３．雑誌名 日本医学看護学教育学会	６．最初と最後の頁 ---
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 大池美也子、道面千恵子
２．発表標題 看護教員コンピテンシーモデルの開発と検証
３．学会等名 日本医学看護学教育学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 大池美也子、道面千恵子
２．発表標題 看護教員コンピテンシーモデルの開発に向けた文献的考察
３．学会等名 日本看護研究学会第２３回九州沖縄地方会
４．発表年 2018年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	道面　千恵子 (CHIEKO DOMEN) (80363357)	九州大学・医学研究院・助教 (17102)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関